

# 体験活動を通していのちと向き合う家庭科の授業実践研究

## — 4事例の検討を基にして —

吉岡 良江<sup>1)</sup>・吉本 敏子<sup>2)</sup>・林 未和子<sup>2)</sup>

本研究では、中学校技術・家庭科、家庭分野の「B 家族と家庭生活」の指導において、「いのち」をテーマにした各種体験活動を取り入れ、体験後の感想から、生徒の内面にどのような変化がみられるかを、4事例を基に検討した。

具体的には、自分史作りと、視聴覚教材を用いた間接的体験を3回、いのちをテーマにした講演会を2回の合計6体験である。各体験毎に自由記述式の感想用紙を配布し、記述後回収した。そこに記された文言の中から「自己認識」「他者理解」「これからの生き方」「いのち」の4カテゴリーに属すると思われる内容を抜き出し、まとめた。本研究では、特に「いのち」に関する記述について分析した結果、間接的体験よりも直接的体験の方が、より多くの生徒が感想を書き綴るといふこと、いずれの体験においても、男子よりも女子に記述の頻度が高いということが明らかとなった。また、書き綴られた文言の語りがどの方向からのものか、即ち自分自身の立場で書いているのか、その体験で話題となっている人物の立場で書いているのか、一般論として書いているのかといった位置取りに注目したところ、同じ体験であっても、個々の生徒によって、受け止め方は異なった。またさらに、文章量だけでは測れない、生徒が如何に主体性をもってその体験を捉えたかを知る手がかりとして、感想の中で位置取りの揺れにも注目した。その結果1体験の中に、「だが」「しかし」等を多用し、自らの考えに大きな揺れが認められるものや、全く揺れがないもの等、個々の生徒によって異なるということが明らかとなった。

キーワード：内面的な学び・いのち・体験活動・自分史

### I はじめに（研究の目的）

中学校技術・家庭科、家庭分野における指導については、1998（平成10年）年度に学習指導要領が改訂されたことを受けて、従来の領域が廃止され、特に家族に関する事項は、「B 家族と家庭生活」において学習することとなった。ここでは家庭分野の目標である「家庭の機能について理解を深め、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる」ために、まず「自分の成長と家族や家庭生活とのかかわりについて考えさせる」ところから、生徒が自分自身を省みることを求めている。

これを受けて、新しい学びの方向性を「生徒自らが自分の生活を見つめ直し、そこからこれからの人生をより自分らしく、主体性のあるものにする」とし、自分史作りやディスカッションを取り入れた実践を、平成16年度より進めている。

各取り組みの最終段階に書き綴る感想からは、自己の存在についての再認識（以下「自己認識」と呼ぶ）や、家族や友人等他者の存在についての記述（以下「他者理解」と呼ぶ）をはじめ、これからの生き方に繋がる記述（以下「これからの生き方」と呼ぶ）や、生や死につい

ての記述（以下「いのち」と呼ぶ）等多数の意見が挙げられている。

このような流れを受けて、平成18年度においては、自分史作りと併せて、よりダイレクトにいのちに向き合わせることで、生徒の内省に効果的にはたらくのではないかと考え、複数回の体験活動を取り入れた実践を試みた。

本研究は、その一連の実践を報告すると共に、「いのち」に向き合う体験活動によって、生徒の内面的な学びにどのような変化が認められるか、4事例の検討を基にみるものとする。

### II 研究の概要

#### 1 研究方法

本研究は、「個々の生徒が如何に自分自身と向き合うことができたか」という、生徒の内面に注目したものであり、数値によっては評価できないものである。

小高は、ブルーナー（1999）のナラティブ・アプローチの概念に基づき、子どもが「どのような位置取り」から（positioning）何を（what）どう（how）語るか」という語りの構成に注目し、対話的授業における生徒の学習経験に関する質的研究を行っている。<sup>1)</sup>

この手法を手がかりにし、本研究においては以下のよ

1) 津市立香海中学校

2) 三重大学教育学部家政教育講座

うな手順で研究を進めることとする。

#### (1) 各体験後の感想におけるカテゴリー分類

各体験後の感想に注目し、4つのカテゴリー（「自己認識」「他者理解」「これからの生き方」「いのち」）に該当する語句の有無を確認する。このカテゴリーの設定は、自分史作りを取り入れた指導を始めて以降、それぞれの自分史を読み解いていく中で、重要と判断したものである。それをここでも取り入れることとする。

各カテゴリーに属すると思われる記述の多少に関わらず、存在が認められるものについては、有りと判断する。

#### (2) 各生徒にみた各体験での「いのち」のカテゴリーに属する記述の把握

よりダイレクトにいのちに向き合う各体験を通して、生徒はそれを如何に感じ取ることができるものなのか。それを把握するための手がかりとして、各体験における「いのち」のカテゴリーに属する記述の有無に注目する。

#### (3) 抽出生徒の決定

本研究は、事例検討という形をとる。それに伴い、特に(2)において、「いのち」のカテゴリーに属する感想を最も多く書いた生徒を男女それぞれから抽出する。ここでいう感想の多さとは、「いのち」に関する記述の全体験を通しての合計数ではなく、いずれの体験からも「いのち」に関する記述があるかどうかという見方によって、判断するものである。つまり常に「いのち」に関する視点をもって、体験学習に臨んでいるか否かを重視したということである。また男女それぞれから抽出する理由は、男女による差異が、本研究において認められるのか否かを検討するためである。

#### (4) 抽出生徒の感想にみる位置取りの把握

次にこの抽出生徒について、各体験後の感想の中の「いのち」に関する記述の部分に焦点を当て、そこでの位置取り、即ちどのようなスタンスで感想を書いているかを見る。

位置取りのパターンとしては、A 生徒自身のこととして受け止める場合（無主語であっても、明らかに自分自身のこととして受け止めていると判断できる場合を含む）・B 話題となっている人の立場での記述となっている場合・C 一般論としての記述となっている場合の3パターンのいずれかで捉えることとする。場合によっては、1 感想の中で位置取りのパターンが変わるもの（以下「位置取りの変化」と呼ぶ）もあり得る。

自分自身のこととして受けとめる傾向が強い場合、主体的に体験に臨んだと判断する。

#### (5) 抽出生徒の各感想における位置取りの揺れの把握

各体験を通して、生徒が如何に主体性をもって体験に向き合っているかを知るための手がかりとして、「いのち」に関する感想を書き記す際の、位置取りの揺れを把握する。「だが」「しかし」等のつなぎ言葉の使用の有無によって判断することとする。

## 2 研究の対象

津市立香海中学校第2学年60名を対象とする。男女の内訳は、男子22名女子38名となっており、2クラスから構成された学年集団である。

## 3 各体験の概要

各体験の概要は表1に示す通りである。

#### (1) 自分史作り

表現方法や取り上げる時代・タイトル・写真や資料の有無等、例年にならい、可能な限りの自由を保障した。指導者が第三者に公開しないという約束も例年通りである。また全7時間程度という時間設定も昨年同様である。

但し、本年度については、「制作中、仲間との話し合いはしない。」というルールを設けた。これは、毎時間終了前に書き綴らせる[その日の取り組み状況や気づき]の項に、「仲間の会話が聞こえてくると、集中力に欠ける。自分の作業の遅れが気になって、あせってしまう。」という意見が寄せられたことによる。

#### (2) 間接的体験1

直接的体験1が、長年末期ガン患者に携わってこられた看護師の方との出会いを予定したことを受けて、ビデオ視聴（「ガンに侵されたロックミュージシャン」）を、間接的体験1と位置付けた。このビデオは、ロックミュージシャンとして活躍する中、ガンに侵された池田貴族さんの最期までを辿ったドキュメンタリー番組である。約50分間のビデオを視聴した後、自由に感想等を記述させた。

#### (3) 直接的体験1

直接的体験1として、元看護師の方による講演会「今を大切に生きる」を実施した。長年末期ガン患者に携わってこられた方で、現在も不妊に関する電話相談や終末医療の在り方について活動されている。約1時間講師の方の話を聞いた後、質疑応答の時間を設けた。

#### (4) 間接的体験2

間接的体験2として、NHKスペシャル「赤ちゃん成長の不思議な道り」を視聴した。以前にも赤ちゃんについて取り上げた「赤ちゃん このすばらしき生命」を視聴し、感想をまとめたことがある。今回は、前回とは

また異なった切り口で、赤ちゃんのもつ能力のすばらしさについて取り上げた内容のものとなっている。前回同様、約 50 分間視聴した後に、感想を書く時間を設けた。

(5) 間接的体験 3

間接的体験 3 として、福祉ネットワーク「忘れられない 小さな命」を視聴した。死産を経験した人たちによって出版された「誕生死」については、その続版である「誕生死 想」と共に、前年度 3 学期に一度紹介している。その本がテレビでも取り上げられたことから、間接的体験 3 として紹介した。

(6) 直接的体験 2

直接的体験 2 として、助産師の方に来て頂き、「心と命の講演会 助産師として出会ったいのち」と題した講演会を行った。本講演会は、保健指導とリンクさせた事業であり、養護教諭と連携を取りながら実施した。講演会の持ち方については、直接的体験 1 と同様である。

なお、各体験の分類については、話し手が直接生徒と関わる場合を直接的体験、ビデオ等の視聴覚教材を用いての関わりである場合を間接的体験と捉える。

表 1 各体験の流れ

回	体験名	内容	学習形態	学習日時	学習時間
1	自分史作り	記述内容等は自由	各自が自席にて	平成 18 年 5 月から 7 月にかけての家庭科及び総合の時間	7 時間
2	間接的体験活動 1	末期ガン患者の最期までを追ったドキュメンタリー	クラス単位でのビデオ視聴	平成 18 年 9 月 14 日	50 分間
3	直接的体験 1	末期ガン患者に携わってこられた元看護師の方の経験談を通して、いのちについて考える	第 3 学年との合同講演会	平成 18 年 10 月 13 日	1 時間 30 分
4	間接的体験 2	赤ちゃんのもつ能力についてのドキュメンタリー	クラス単位でのビデオ視聴	平成 18 年 12 月 11 日	50 分間
5	間接的体験 3	誕生死についてのドキュメンタリー	クラス単位でのビデオ視聴	平成 18 年 12 月 12 日	50 分間
6	直接的体験 2	助産師の方の経験談を基にして、いのちについて考える	第 3 学年との合同講演会	平成 18 年 12 月 14 日	1 時間 30 分

III 事例分析

1 感想にみる記述内容の概要と事例対象生徒の抽出

次に示すのは、対象生徒 60 人が各体験を通して、どのような観点で感想を書いたかをカテゴリ別にみたもの(表 2)と、その具体的な記述内容(表 3)、及び「いのち」のカテゴリに属する記述の有無を、生徒一人ひ

表 2 各体験にみた各カテゴリに属する記述の出現数

体験名	自己認識	他者理解	これから の生き方	いのち
①自分史作り	56	44	37	11
②間接的体験 1	15	52	15	17
③直接的体験 1	35	25	35	30
④間接的体験 2	14	6	3	0
⑤間接的体験 3	19	47	17	11
⑥直接的体験 2	29	24	19	22

りを対象に捉えたもの(表 4)である。

④間接的体験 2 では「いのち」に関する記述が 0 である。一方、記述が認められる他の各体験については、③直接的体験 1 が 30、⑥直接的体験 2 が 22 となっている。「いのち」に関する記述に限れば、間接的体験よりも直接的体験に多く記述が認められる。

表 3 各体験にみた各カテゴリに属する主な記述例

体験名	カテゴリ	主な記述例
①自分史作り	自己認識	・自分の小さい時と今とを比べた。・反抗期だが自分勝手にしてはいけない。
	他者理解	・周りの人の存在は大きい。
	これからの生き方	・未来の事を考えるのはとても楽しい。・障害のある弟のお陰で福祉の道を考えるようになった。
	いのち	・亡くなったおばあさんへの思いがいっぱいある。
②間接的体験 1	自己認識	・自分の生き甲斐になることを見つけた。
	他者理解	・両親の気持ちが少し分かった。
	これからの生き方	・私も池田さんのように大切な人を見つけた。
	いのち	・命の大切さは命について経験しないと分からない。
③直接的体験 1	自己認識	・この頃すごい早さで時間が過ぎていく。・忘れていたことを思い出した。
	他者理解	・人によって生かされている。・家族や友だちに支えてもらった。
	これからの生き方	・笑顔を忘れずにこれからも生きたい。・自分の生き甲斐になることを見つけた。
	いのち	・自分はいつか死ぬんだあと考えた。死ぬ時未練が残らないように頑張って生きていこう。・死は身近にある。
④間接的体験 2	自己認識	・私もそうだったのかなあと思った。
	他者理解	・人との繋がりには人を育てるという言葉があったが、これは今の私たちにも言える。
	これからの生き方	・子どもが産まれたらいっぱい話しかけようと思った。
	いのち	
⑤間接的体験 3	自己認識	・私も昔の飼犬にすごく愛着があった。
	他者理解	・その人だけが向き合うのではなく、周りの人も向き合うのがいい。
	これからの生き方	・将来自分がこのようになったら、きちんと赤ちゃんと向き合いたい。・これからは生死ということに目を向けていきたいと思った。
	いのち	・お母さんには赤ちゃんの分まで生きて欲しい。
⑥直接的体験 2	自己認識	・自分を大切にしないでと改めて思った。
	他者理解	・最近親は口うるさいが、自分が産まれたときに喜んでくれたのかと思うと涙がでそうだった。
	これからの生き方	・今ぐらいから将来のことについて考えていこうと思う。
	いのち	・奇跡から産まれた命でもそれが何万もあつたら 1 つの命は軽くなってしまわないかと思った。

間接的体験 2 からは、「いのち」に関する記述がなかったため、全 6 体験の内、最も記述の多かった生徒は、表 4 より生徒番号 34 女子の 5 ヶとなる。女子においては、続く記述数 4 ヶの生徒が 4 人である一方、男子は生徒番号 20 の 3 ヶが最高で、続く 2 ヶが 5、25、50、52 である。

本研究においては、事例対象として男女共に抽出することから、各感想における記述数に偏りはあるが、男女それぞれに出現数の多い生徒として、男子からは、生徒番号 20 と 50、女子からは、生徒番号 15 と 34 を対象生徒とする。

表4 各生徒にみた各体験での「いのち」の категорияに属する記述の有無

各体験名と番号との対応  
 ①自分史作り ②間接的体験1 ③直接的体験1 ④間接的体験2  
 ⑤間接的体験3 ⑥直接的体験2

生徒番号	体 験						記述数
	①	②	③	④	⑤	⑥	
1男		○					1
2女					○	○	2
3男							0
4女	○		○				2
5男			○			○	2
6女						○	1
7女			○				1
8女		○					1
9女			○				1
10男					○		1
11女							0
12女		○	○		○	○	4
13女		○					1
14男							0
15女		○	○		○	○	4
16男							0
17女	○		○		○		3
18女		○	○		○		3
19女					○		1
20男	○		○		○		3
21男			○				1
22男			○				1
23女			○			○	2
24女		○				○	2
25男	○		○				2
26女						○	1
27女	○	○	○			○	4
28男			○				1
29女		○	○				2
30女		○	○			○	3
31女			○				1
32男			○				1
33女			○				1
34女	○	○	○			○	5
35女	○	○				○	4
36女							0
37女							0
38女	○	○	○				3
39女	○						1
40女	○	○				○	3
41女			○			○	2
42男			○				1
43女			○			○	2
44女		○	○			○	3
45女		○					1
46男						○	1
47男			○				1
48女		○				○	2
49男							0
50男						○	2
51男							0
52男			○			○	2
53女			○				1
54女						○	1
55男							0
56女	○		○			○	3
57女							0
58男							0
59男							0
60女							0

感想を記している。事例3の生徒とは対照的に、自分自身のこととして捉えた感想が最も多く、次いで話題の人の立場で捉えたものとなっている。

テーマに関連した記述の有無で判断すると、事例3や事例4の生徒は、事例1や事例2の生徒よりも、その数の多さから、より主体的に体験に臨んだと言える。

しかし感想の中に見られる位置取りに注目すると、事例3の場合と事例4の場合とでは大きく異なり、事例4の生徒に、より高い主体性を認めることができる。

3 事例対象生徒の各体験の「いのち」に関する感想にみる位置取りの揺れ

次に位置取りの揺れの有無に注目する。事例1の生徒は、自分自身のこととして受けとめた記述もしくは、一般論としての捉えである。位置取りの変化は認められるものの揺れは存在しない。

事例2の生徒は、記述数は少ない。しかし、⑤間接的体験3にみられるように、一連の記述の中で、AからB、BからA、そしてまたAからCへと位置取りの揺れ(棒線部分)が数回に渡って認められる。記述量は少ないが、揺れに関しては、高い主体性が認められることとなる。

事例3の生徒は、続く事例4の生徒と共に、各体験の中で、「いのち」に関する多くの感想を記している。位置取りも多岐に渡るが、事例2の生徒のような一連の文章における位置取りの揺れは認められない。

事例4の生徒は、間接的体験2以外の全ての体験に、「いのち」に関する記述が認められる。またそれぞれの体験における文章量も多い。②間接的体験1や③直接的体験1においては、自分自身のこととして捉えた記述が非常に多い。この生徒には、位置取りの揺れは1カ所認められる。

2 事例対象生徒の各体験の「いのち」に関する感想にみる位置取りとその変化

では、生徒は各体験を経る中で、それぞれどのような位置取りで「いのち」と向き合っているのだろうか。上述した4人の生徒について見てみることにする。

具体的にどのような文言を書き綴っているかを、表5に紹介する。また併せて、位置取り及びその変化についても確認する。

なお位置取りについては、1研究方法の(4)において記した通りである。

事例1の生徒は、全6回の体験の中で、①自分史③直接的体験1⑥直接的体験2において、「いのち」に関する感想を書いている。位置取りについては、自分自身のこととしてもしくは一般論としての捉えである。講師の方等話題となった人のこととしては、捉えていない。

事例2の生徒は、全6回の体験の中で、後半にあたる⑤間接的体験3と⑥直接的体験2において、「いのち」に関する記述がみられる。

事例3の生徒は、①自分史④間接的体験2以外の体験で、「いのち」に関する感想を書いている。話題となっている人もしくは一般論としての位置取りが非常に多く、複数回の位置取りの変化も認められる。

事例4の生徒は、④間接的体験2以外の全ての体験に

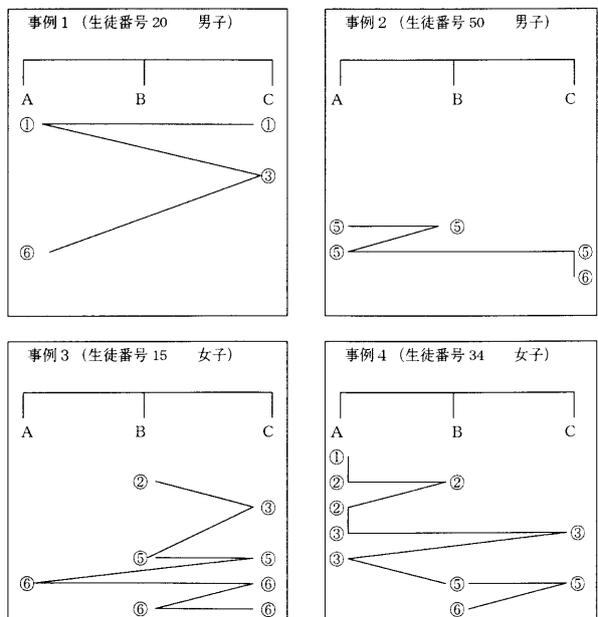


図1 事例対象生徒の各体験における位置取りの変化及び揺れ

表5 事例対象生徒の「いのち」に関する記述とその位置取り

位置取りパターン

- A 自分自身のこととして受け止める場合
- B 話題になっている人の立場での記述になっている場合
- C 一般論としての記述になっている場合

事例1 (生徒番号 20 男子)

体験名	「いのち」に関する記述	位置取り
①自分史	・人間は限られた時間しか生きていられないので、この時間を大切にしたい。 ・人生が終わる時に幸せだったと思えるように生きたい。	C A
③直接的体験 1	・一番印象に残っているのは人は必ずいつかは死ぬというお話だった。	C
⑥直接的体験 2	・命の誕生を間近で見ている人の話を聞いて良かった。	A

事例2 (生徒番号 50 男子)

体験名	「いのち」に関する記述	位置取り
⑤間接的体験 3	・僕はまだ産まれたばかりで死んでしまうのだったら、大丈夫じゃないかと思っていたが、「思い出がない程逆に辛い。」ということを知り、確かにそうだった。でも自分が苦労して育ててきた子が死んでしまうよりはましだなと思った。でも、誕生の悲しみ・苦しみは経験した人にしかわからないと思う。	A→B→A→C
⑥直接的体験 2	・いのちはすごく大切なんだなと思った。	C

事例3 (生徒番号 15 女子)

体験名	「いのち」に関する記述	位置取り
②間接的体験 1	・池田さんは精一杯一日でも一時間でも長く生きようと必死に闘ったし、その結果が最悪のものだったにしても、生きた証はちゃんと残ったと思う。	B
③直接的体験 1	・予測された死や本人、家族の方達の思いが強く伝わってきた。	C
⑤間接的体験 3	・もう生きてはいない赤ちゃんを出産する気持ちは、計り知れないほど悲しいことだろうと思った。 ・短い時間でも一緒に過ごせた我が子こそが忘れられない小さいいのちなのだった。	B C
⑥直接的体験 2	・自分たちが望まれて産まれてきたと思うと、とても嬉しかった。 ・いのちはどんな形であれ、どんな大きさであれ、どんな長さであれ、尊く大切なものだと感じた。 ・特に印象に残ったのは半年しか生きられないと言われた赤ちゃんの話。その生が極端に短くても周りの人に愛されたと感じているのだろうと思った。 ・生きると言うことは死ぬこと。でも死ぬということは生きることではないと思った。	A C B C

#### IV まとめと考察

一連の取り組みから、次の3点が明らかとなった。今後の指導に如何に生かしていけるかということと併せて、次に紹介する。

##### (1) 男女による差異

漠然と文章量のみをみるだけでは掴めないが、「いのち」という本体験のテーマに即する記述は、出現回数も記述量も圧倒的に女子の方が多い。これは、事例に取り上げた生徒に限らず、全体的な傾向としても認められる。

事例4 (生徒番号 34 女子)

体験名	「いのち」に関する記述	位置取り
①自分史	・まだ13年しか生きていないから全然書けなかった。	A
②間接的体験 1	・最初の題名を見たとき、いい気分はしなかった。ガンと聞くと嫌だ。本人も嫌だけど家族も嫌だ。私のおじいちゃんもガンだ。いつも辛そうに薬を飲むのを見ると胸が痛い。 ・池田さんを見ていると、今を大切に生きようというのが伝わった。 ・死ぬというのは悲しいけれど人間誰でも通る道で早く来いかなと母に言われたが、そう分かっているけど嫌だ。 ・命の大切さは自分が何か命について経験しなければ分からない。 ・「死んで」等の言葉は絶対言ってはいけないと思った。	A B A A A
③直接的体験 1	・私の家族にも肺ガンのおじいちゃんがいる。 ・今の私にはおじいちゃんにしてあげることが何もないかなと思っていたが、鈴木さんが「話してあげること」と言われたので、今は話しかけるようにしている。 ・私にとって死ということはまだ遠いように思っていた。けれど今回のいのちの授業を通して死ということとは人にとって避けようのないものだった。死がなければ生はないからだと思う。 ・このいのちの授業を通していのちの素晴らしさを前よりももっと知ることができた。とてもいい経験になった。これからは生かしていきたい。	A A A→C A
⑤間接的体験 3	・一番印象に残ったのは、戸籍にのらないということだ。みんな同じ大切ないのちなのにかわいそうだった。 ・私たちが今生きているのはすごい奇跡なんだなと思った。	B C
⑥直接的体験 2	・この世の中で生きていることは、私にとっては当たり前でも、元気に産まれてこれなかった赤ちゃんや中絶手術でいのちをうしなってしまった赤ちゃんにとったらすごく甘い考えだったなと思った。	B

このことから、今後は男女による差異を踏まえた授業作りが必要である。記述の有無だけでなく、事例2の生徒にみられるような位置取りの揺れは、その話題を、しっかりと我が事として捉えているからこそのことだと考えられる。些細な眩きも見逃さない教師の心構えが大切になってこよう。

##### (2) 個人差

各体験を追う毎の、記述の増減や位置取り及びその変化や揺れに4事例で取り上げた抽出生徒相互の共通性は認められない。

また事例3と事例4の生徒は共に女子で、非常に多くの記述が認められる。しかしその位置取りに注目すると、顕著な差が認められる。

事例4の女子が常に我が事として捉えていること、その背景には、祖父の病気という実体験が伴っていることが大きく影響しているとも考えられる。そう言う意味では、各生徒のおかれている生活実態等を知る努力も、指導上重要となってこよう。

##### (3) 体験の設け方による差異

各体験における「いのち」のカテゴリーに属する記述が認められる生徒の数は、自分史作りが11人、間接的

体験1が17人、間接的体験2が0人、間接的体験3が11人であるのに対し、直接的体験1が30人、直接的体験2が22人という結果になった。

これまでも様々な形での体験活動を取り入れてきている。視聴覚機器等を活用しての体験も多々取り入れているが、「いのち」をテーマに行う体験活動では、直接講師の方と触れ合う体験や、語り合う体験が、「いのち」を意識させるにあたって、効果的であったようだ。今回は2回の直接的体験として、看護師としてまた助産師として活躍されている方との触れ合いの場を設けた。講師の方の声のトーンや表情等からも、感じ取る部分は多かったとも考えられる。そういう意味では、今後さらにテーマと体験の場の設け方に、工夫が必要である。

また、今回間接的体験2も「いのち」をテーマにした内容であったものの、「いのち」に関する記述が0人であったということに注目すると、内容の選定にも工夫が必要であろう。

## V 今後の課題

本研究においては、生徒が書き綴った感想の中に、テーマに関連した記述があるか否か、あると認められる場合、それはどの位置から捉えて書いたものなのか、捉え方に変化や揺れはあるのか。このような視点で生徒の内面的な学びを見てきた。「よりダイレクトにいのちに向き合わせる」ことが、生徒の内省に効果的にはたらくのではないかと考え試みた実践であったが、数値によって評価できない難しさ等課題が多いのは確かである。テーマの設定や本研究で用いたカテゴリーの設定に関しても、絶対的なものではない。しかし生徒の内面的な学びというもの、学校教育において今後更に重要になるであろうということを感じると、困難が伴うのは確かであるが、指導者の生徒をみる目即ち洞察力の向上と併せ、よりよい

体験の場の設定及び、質的評価の在り方について、引き続き検討していきたい。

## 引用文献

- 1) 小高さほみ. 高校家庭科の対話的授業における生徒の学習経験に関する質的研究 (第1報). 日本家庭科教育学会誌 47 (3), 2004 p. 204

## 参考文献

- 内田伸子著 「誕生から死までのウェルビーイング-老いと死から人間の発達を考える」 金子書房 2006
- 平山満義編著 「質的研究法による授業研究 教育学・教育工学・心理学からのアプローチ」 北大路書房 1997
- アルフォンス・デーゲン著 「死とどう向き合うか」 2006 日本放送出版協会
- 日本科学未来館 MeSci Magazine 編集部 「ミーサイマガジン9 生命・恋愛・科学」
- 日本科学未来館 2006
- 志水宏吉編著 「教育のエスノグラフィー 学校現場のいま」 嵯峨野書院 1998
- 秋田喜代美著 「授業研究と談話分析」 財団法人放送大学教育振興会 2006
- 秋田喜代美・恒吉遼僚子・佐藤学編 「教育研究のメソドロジー 学校参加型マインドへのいざない」 東京大学出版会 2005
- 平山満義編著 「質的研究法による授業研究 教育学・教育工学・心理学からのアプローチ」 北大路書房 1997